

新型コロナウイルス予防対策への対応を踏まえた
特別活動の課題と今後に関する調査

第一次結果報告

日本特別活動学会研究推進委員会
コロナ禍下の特別活動に関する学会員対象アンケート WG

2020年10月

1. はじめにー調査の概要

本調査は、2020年6月19日から7月15日にかけて、日本特別活動学会が会員（2020年9月現在 578名）を対象に「新型コロナウイルス予防対策への対応を踏まえた特別活動の課題と今後」について意見を聴取するために実施したものです。調査はGoogleフォームを利用した自由記述を中心とする質問紙調査で、65名の会員から回答を得ました（回収率11%、内訳：小学校教員5名、中学校教員7名、高等学校教員5名、大学教員38名、その他10名）。

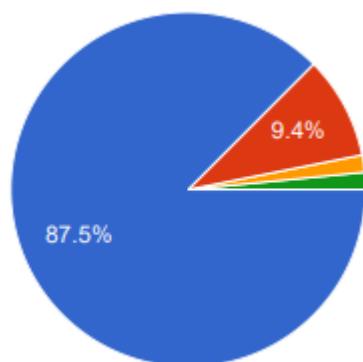
調査の実施主体である日本特別活動学会研究推進委員会において有志を募り「コロナ禍下の特別活動に関する学会員対象アンケートWG（通称：コロナ研）」を結成し、分析にあたりました。本報告はその第一報告です。なお、調査結果を理解するうえでの注意点を巻末にまとめましたので、そちらもあわせてご覧ください。

2. 各項目の分析

①新型コロナウイルス感染予防対策のために学校が休校になっていた期間、卒業式、入学式といった学校行事のみならず、数々の特別活動が中止になったり実施方法を大幅に変更しての実施となったりしました。あなたは、この期間、特別活動の意義や特質について改めて考えることができましたか。(図1)

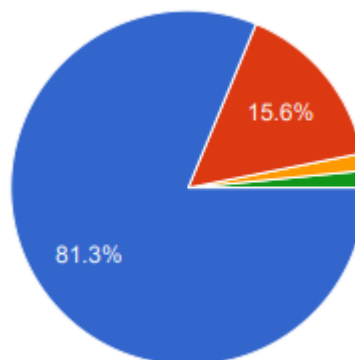
②新型コロナウイルス感染予防対策のための休校期間が終わって学校が再開された以降も、特別活動の実施に関して数々の制約があることを見たり聞いたり、あるいは当事者として実感したりしたことがどの程度ありましたか。(図2)

- ・新型コロナウイルス感染予防が最優先となる社会や学校教育の現状のなか、特別活動の意義や特質について改めて「非常に考えた」人が9割近くに上った。
- ・8割以上の人々が特別活動の実施に関して制約があると感じていた。



- 非常に考えた
- 少し考えることがあった
- あまり考えることはなかった
- まったく考えなかった

図1 特別活動の意義や特質について考えたか



- 非常にあった
- 少しあった
- あまりなかった
- まったくなかった

図2 特別活動の実施に関する制約

(山田真紀)

③ 新型コロナウイルス感染予防対策のために「新しい生活様式」が求められています。そのなかで、次の特別活動はどのように工夫したら実施できると思いますか。あるいは工夫しても実施できないとするならばその理由は何ですか？ 次のそれぞれの活動について自由に記述してください。なお、該当する情報がない活動は空白のままかまいません。

③-1 学級や学校の生活づくりの活動の 学活(1) の工夫／実施できない理由

学級活動(1)は、「感染防止対策の工夫をしながら実施していく」という回答が約7割あり、「実施が難しい」という回答（1割強）を大きく上回った。その理由として、「新型コロナウイルスによる生活の変化の中で、日常の学校生活を維持するために自分たちに何ができるかを話し合う必要がある」「With コロナの学校・学級生活における新しいルールやモラルについて、児童生徒が自分たちでできることを考える時間は学級活動(1)の時間だと考える」こと等が挙げられた。一方で、「実施が難しい」理由には、教科の授業時間確保の問題や、話し合い活動の特質と感染症対策との両立の難しさが指摘されていた。

学級活動(1)の実施のために提案された工夫では、「3密を避け、感染症対策を取る工夫」「コロナ禍の学級・学校生活づくりの話し合いまたは提案」「ICT機器の活用」が多く出された。具体的には、「机の距離を離す」「マスクやフェイスシールドの着用」「コの字型に拘らない」等の工夫が提案された。また、時間的な余裕がない状況の中で、「コロナ禍における学級や学校生活をどう作るか考える点に内容を重点化して取り組むとよい」という考えも示された。「感染を防ぎつつ、日常の学校生活を維持することこそが児童生徒にとって切実な課題であり、指示された予防策に従うだけでなく、自分たちに何ができるかを話し合うことは絶好の教材になる」「児童生徒自身の手でコロナ禍における新しい生活様式の下での学校生活を創る活動を提案する活動を進めることが重要である」等の考えも示された。さらに、会話による飛沫感染を防ぐ「新しい形態の話し合い活動」を創る工夫として「オンラインやタブレット等のICT機器を活用した学級会の実施」や、「ノートやワークシート、アンケート、ホワイトボードの活用等」「音声言語ではなく文字言語を使った話し合い活動の実施」等の工夫が寄せられた。実施のための時間を生み出す工夫としては、「朝の会」「終わりの会」等の短時間の活動や話し合いの規模の縮小や精選、活動のための場所や時間の確保が挙げられ、短時間で効果的な活動を生み出すことや、時間枠の確保といった工夫も示された。

(秋山麗子)

③-2 適応や成長、健康安全などに関する内容の学級活動（2）の工夫／実施できない理由

学級活動（2）が実施できないという回答よりも、このように工夫すれば実施できるとした回答の方が圧倒的に多かった（約9割）。

新型コロナウイルスによって学級活動（2）が実施できないとするのではなく、その感染予防こそを、学級活動（2）の題材とすべきであるとの回答が多かった。たとえば、「これまでとは異なる『新しい生活様式』における『適応や成長、健康安全』は、いま、まさに学校教育の新しい課題として、対応していかなければならない課題である。自分の仲間たちが、新しい生活様式でみんな苦勞していることを共感したり、仲間のうちに数人は、〇〇〇のような工夫しているなどか、意見交換することは、今だからこそ、相当の意味がある」としたり、「単に、感染症対策を先生が教え込むのではなく、必要で正確な事柄は先生が伝え、『だから自分は、自分たちは、このようにしていこう』『この学級では、このようなことを約束事として生活しよう』と意思決定することが学活（2）の取り組み」であるとしたりする回答があった。

また、「(教科学習の) 普段の授業が可能なのだから、(学級活動は) まったく問題なく可能」であり、机の間隔をあける、静かに発言するなど工夫ができるとした回答が多かった。

ICT、オンラインを活用した話合いが可能とした回答も多かったが、「ホワイトボードや白い画用紙に自分の意見を書いて黒板に貼って全員が見られるようにしたり、アンケートをとって、その結果を教員や子供たちで集計してグラフ化したり…といった工夫ができる」としたり、ワークシートの活用など、書くことを通した意見の共有と意思決定ができるとしたりする回答も、ICT活用とほぼ同数あった。

なお、学級活動（2）が実施できない理由としては、集まれない、話合いをすることができないといった理由のほか、時間が足りない、教師に余裕がないとした回答があった。また、学級活動（2）の題材として感染予防を取り上げるとしても、教師主導になりがちである点を指摘する回答もあった。

(添田晴雄)

③-3 キャリア形成に関する内容などの学級活動（3）の工夫／実施できない理由

③-3「キャリア形成に関する内容学級活動(3)」は、職場体験など、学校外との関りが想定されるため、新型コロナウイルス感染症の影響が大きい。例えば、「新型コロナウイルス感染症拡大に伴う分散登校の実施や感染症予防の観点からできない」「職業体験活動やオープンキャンパスの受入れ中止により学活（3）もできない」というものや、「感染症拡大への対応により年間計画の見直しがなされ、他の活動に時間が割かれる」という意見があった。

肯定的な意見では、いくつかの工夫のバリエーションがみられたが、キャリア教育を扱う観点から「オンラインの活用」や「日数の縮減」など、工夫次第では実施が可能であるという意見があった。興味深いのは、学級活動(3)の意義を踏まえ、「進路について自分と向き合っている時間とした」り「生活を振り返らせ、今後の在り方について考えさせる場を設ける」という意見で、これらから学級活動(3)において実施されるキャリア教育には職場体験が大きな役割を担っていることが確認できる。学校外での活動や話し合いが難しい中、自らの生活や進路を見つめなおす時間を有意義に活用するキャリア教育を再構築する工夫が示されていた。

そのほか、コロナ禍だからこそ、「これからの困難な時代をどう生きるのか」を考えさせたり、「コロナ禍においても、仕事に取り組まなければならない職業のあること、その職業に従事している人々へ感謝の気持ちを持つこと等について指導し、勤労観・職業観の育成を図ったりする」など、今だからこそ扱える題材があるのではないかとの意見もあった。

(田中光晴)

③-4 異年齢集団による学校生活充実のための児童会活動・生徒会活動の工夫／実施できない理由

児童会活動・生徒会活動は、「感染防止対策を取りながらも実施する」という回答が約7割近くあった。その理由として、この活動は、「児童生徒の自治的能力を育む活動である」ので「コロナ禍における新しい生活様式を、児童生徒の手でつくる活動を後押しする取組を進める必要がある」という考えが示された。しかしながら、「実施が難しい」という回答も2割近くあり、その理由として、児童会活動・生徒会活動は全校規模の異年齢集団による活動なので、「時間的な制約が大きい」こと、「コロナ感染のリスクが高い」ことが挙げられた。

児童会活動・生徒会活動実施の工夫については、③-1学級活動(1)の回答と同様、「3密を避け、感染症対策を取る工夫」「コロナ禍の学級・学校生活づくりの話合いまたは提案」「ICT機器の活用」が多く出された。感染症対策や3密を避ける工夫として、「マスクの着用」等の③-1で出された工夫の他、異年齢による児童生徒の交流が特質のため、「人数を減らした小グループの活動」「学年ごとに活動の時間帯を変えた実施」「会場の換気・マスク着用・手洗い・消毒の徹底」「3つの条件(密閉、密集、近距離での会話や発声)が同時に重なる場を避けた活動」等の具体的な工夫が示された。また、学校生活づくりの提案として、「コロナ禍における学校生活をどう作るかに内容を重点化して取り組むとよい」「感染を防ぎつつ、日常の学校生活を維持することこそが児童生徒にとって切実な課題である」「指示された予防策に従うだけでなく、自分たちに何ができるかを話し合うことは絶好の教材になる」「児童生徒自身の手でコロナ禍における新しい生活様式の下での学校生活を創る活動を提案する活動を進めることが重要である」という考えが示された。ま

た、児童生徒の「友達関係を構築」し、「学校生活を楽しく豊かなものにするために校内コロナクイズラリーをする」というような具体的な例も含め、異年齢集団活動や行事の在り方について考える必要が示された。さらに日常の学校生活上必要な仕事である各種委員会の活動は、「学校生活を円滑に行うためにも、感染予防の工夫をしながら実施することが大切である」という意見が出された。ICT 機器の活動については、オンラインやタブレット等の ICT 機器を活用や、立会演説会や生徒総会、ペア学年合唱をオンラインで行う等の具体的な工夫も寄せられた。さらに、今までにも使われていた校内放送や掲示板、アンケート等のアナログな活動ツールも活用し、密を避けて活動を実施するとしての回答も見られた。実施のための時間を生み出す工夫としては、短時間の活動や話合いの規模の縮小や精選、活動のための場所や時間の確保が挙げられた。

(秋山麗子)

③-5 共通の興味・関心を追求するクラブ活動（小学校のみ）の工夫／実施できない理由

クラブ活動には多様な活動が含まれているので、活動の種類に分けて言及する回答が多かった。「歌や楽器演奏など、リスクの高いものはできない可能性がある」「ダンスなども身体接触をとまわらない、距離を保ったものであれば、可能」「外で活動するスポーツについては可能（マスクをせず熱中症に気を付ける）感染を広げずに楽しめる工夫を児童みずから提案できるような活動の進め方が望ましい」などである。

また、「どうしても音楽系の活動を入れたいといった要望があるならば、合唱ではなく音楽鑑賞のクラブにしたり、自分の好きな音楽などを新聞づくりといった紙ベースで紹介し、互いの趣味を共有することは可能」「集団スポーツは、基礎トレーニング中心の個人でできる活動中心にする」などのように、感染が心配される種類の活動であっても、少し方法を変えてみると可能であるといった指摘もあった。さらに、「読書などの活動のクラブの人数枠を増やす」などの回答もあった。

クラブ活動のための時間確保については、「教室の移動に要する時間を縮減するため、クラブ活動を、昼休みに続く授業時間帯に設ける」「回数は、今までの半数であっても仕方がないので、とにかく時間枠を確保することが必要」といった回答があった。

ICT の活用については、コロナ時代のクラブとして、「オンラインクラブ」「タブレットやスマホの活用」などの回答があった。さらに、それらの利用により、「生徒たちの活動意欲を引き出す。これまでのクラブの趣旨をさらに発展的に思考する機会になる。子供たちの新しい興味・関心の追求に期待できる」としたり、「オンライン上ではむしろ異年齢交流にはつながりやすい」としたりした回答があり、オンラインを使って「なすことによって学ぶ」ことを可能にできるとした回答もあった。

実施できない理由としては、「教科などの授業時間を確保するため、カットせざるを得ない」、三密のため「今は、クラブ活動の実施は困難である」、「外部講師が呼べなくなった」などの回答があったが、その数は限られていた。

(添田晴雄)

③-6 卒業式などの儀式的行事の工夫／実施できない理由

③-6 卒業式などの儀式的行事について、アンケートの実施時期においては、卒業式、修了式は軒並み中止になっており、入学式、始業式についても実施するための努力がなされているということで、行事が実施可能であるというような回答は少ない。ただ、工夫をすれば実施は可能であるという回答が多数を占め、実施しようとしている（または工夫して実施された）ことが把握された。ただし、実施できたとしても形式的な実施となり、儀式的行事が持つ目標を達成することが難しいと考えている回答者が少数だが存在していた。

儀式的行事を実施する際の工夫としては、参加者の範囲の縮減、時間の短縮、歌を歌わない、屋外での実施などの三密を回避すること一番多く意見として寄せられた。次に多かったのは、ICTを活用するアイデアが寄せられていた。動画の配信や、校内放送の活用などである。また少数意見ではあったが、行事の企画などへの児童生徒の参画を促すことで、この状況でもよりよい行事にすることとする工夫であった。である。

(小原淳一)

③-7 文化祭、合唱コンクールなどの文化的行事の工夫／実施できない理由

③-7 文化祭、合唱コンクールなどの文化的行事について、文部科学省からの新型コロナ対策のマニュアルに、「合唱」を避けることの例示があったことの影響からか、「合唱コンクール」の実施についてはかなり慎重な姿勢が見られた。これは文化祭についても、合唱や劇を避けるという方針であることも多く意見として寄せられていた。先の儀式的行事より、この文化的行事のほうが実施できないとする回答が多かった。

文化的行事を実施するための工夫として、児童生徒の作品などの展示を行うことへ変更することや、一般公開の中止を行うことや規模の縮小などで三密を回避すること。また先の儀式的行事と同様に ICT の活用による動画作成を行うことでの文化祭実施が意見として挙がっていた。また、本年度の授業日数の現状の影響を鑑み、教科の学習との連携なども挙がっていた。

(小原淳一)

③-8 運動会などの健康安全・体育的行事の工夫／実施できない理由

多くの回答が、運動会などを念頭に置いた回答であったが、他の行事でも健康診断は地域の医師会との連携が難しいことや避難訓練なども回数を減らすなどのことが行われているという回答があった。健康安全・体育的行事が実施できないとした回答は、儀式的行事と同程度であった。実施ができないとした理由の中で、運動会の実施時期に言及したものがあり、一方で秋の実施に向けて検討中である回答も存在したため、もともとの行事予定との関係で十分に検討できない現場の実態をうかがわせた。

運動会などはもともと屋外での開催であるが、それでも種目によっては身体接触を伴う競技があるため、種目の変更がなされたり、応援などで声を出すことをやめることとしている。主に実施のための工夫はそれらの三密を回避することが挙げられており、他にはプログラムの縮減、参加者を減らすことなどが挙げられていた。

他の工夫として、ICTの活用や生徒の企画への参画が少数意見ではあったが、挙げられていた。

(小原淳一)

③-9 修学旅行、遠足などの旅行・宿泊的行事の工夫／実施できない理由

③-9「修学旅行などの旅行・宿泊的行事」は、実施に伴い生じる「密」が回避できないという理由が多かった。「校外はコントロールできない要素が多すぎる」という意見や行先を変更してできるだけ外部の人と接触しないよう計画を見直すとのコメントも多かった。また、保護者への説明責任や密回避のためのバス増便によるコスト増など実施に伴う様々なハードルも提示された。実施に向けての工夫としては「旅行業協会のマニュアルを遵守」「オンラインの活用」「感染症リスクや対処方法を学ぶことから始める」といったものがあった。

旅行・集団宿泊的行事や③-10の勤労生産・奉仕的行事は、外部との接触があるため、中止の判断が多い。オンラインという工夫を提示する意見も多いが、これまでオンラインの経験がないことを考えると、実施可能性があるとしたらオンラインによるものではないかという未知の領域への若干の希望という意味での提案という印象を受けた。

(田中光晴)

③-10 職場体験、ボランティア活動などの勤労生産・奉仕的行事 の工夫／実施できない理由

③-10「職場体験等勤労・奉仕的活動」について、特に職場体験については、受入側が整わないという理由から「中止」が多かった。また、学外との連携に手が回らない、教科時間の確保によりカットというような、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う教員の負担増を理由としているものもあった。一方で、職場体験を実施予定のところでは、「受入れ先との丁寧な打合せ」「密を避けながら実施」「オンラインの活用」などの工夫が提案された。また、「従来のやりかたでは職場体験や勤労生産的な活動や行事を実施しにくくなった。いま、まさに大人たちが、働けない、仕事ができない事態に直面している。職場に関すること、社会に貢献することを学ぶ・体験する必然性がなくなったわけではない」という指摘があった。

児童・生徒間の密や学校における密はコントロール可能だが、それに対し、学校外における活動はコントロールができないため、学外での活動はハードルが高いと捉えられていると察せられる。ただし、修学旅行と職場体験の項目でみると、前者は旅程デザインにより外部者との接触を減らせる余地があり、受入れ側が必ず存在する後者より実施の計画は調整しやすいのかもしれない。あるいは、修学旅行はなんとなく実施すべきという行事の中でも「修学旅行優先意識」のようなものが働いているのかもしれない。

(田中光晴)

④ ICT を使うことにより「3密」回避をはかりつつ特別活動を実践した事例があるようです。ご存知でしたら、それはどのような実践かをお教えてください。また、そのような活動の際、特別活動の理念からみて、注意すべき点は何だと思えますか。お考えをお教えてください。〔休校中あるいは分散登校中の場合〕と〔学校再開後の「新しい生活様式」という制限下の学校生活での場合の〕のそれぞれについて、自由に記述してください。該当の実践をご存知でない場合は空白のままでもかまいません。

④-1 休校中あるいは分散登校中の場合

新型コロナウイルス感染症の拡大防止による休校は地域によって違いはあるが、2020年2月末から5月ごろまで続いた。その間、学校教育に対して社会的関心が向けられたトピックの1つがオンライン授業などに代表されるICT活用についてである。調査対象者は休校中の特別活動におけるICT活用についてどの程度、知っているのだろうか。回答内容をみる前に回答の有無の状況を確認したところ、④-1について回答した者の割合は3分の1強(約37%)に留まっていた。休校中における特別活動のICT活用についての認知度は低いことがうかがえる。

回答の内容を見てみると、Zoomを用いた学級活動の実践に関する記述が多かった。たとえば「Zoomなどを利用した朝の会」「Zoomを活用した学級での朝終礼や、話し合い活動。」などがあげられていた。Zoom等を活用することの意義について「対面の次善策として、つ

ながることのツールとして ICT が使える」という記述を行った回答者がいた。ただし「Zoom 等を用いての話し合い活動等は可能かもしれないが、家庭によって機器や通信に差が出てしまうので、それが出ないような補助が必要である。」という ICT 活用に関する課題に言及する記述もあった。

(長谷川祐介)

④-2 学校再開後の「新しい生活様式」という制限下の学校生活での場合

地域による違いはあるものの、新型コロナウイルス感染症の拡大防止による休校措置が解除された時期は早いところで5月以降だった。本調査を行った6月は「学校再開後の“新しい生活様式”という制限下の学校生活」がはじまって1ヶ月程度ということもあり、また④-1の結果からも推察されるように、学校再開後の特別活動における ICT 活用の実践事例は必ずしも多くはなかった。そのことは、④-2 を回答した者の割合も約3分の1(約32%)に留まっていたことからわかる。

記述内容をもてみると、Zoom の活用が紹介されていた。そのことは④-1 と同じであるのだが、学校再開後については学級活動以外での実践事例が紹介されていた。たとえば「Zoom を活用した生徒会交流会」などである。その他、「Zoom を使った授業参観を実施する」という記述もあった。

ただし特別活動の ICT 活用については学校再開後ではなく、休校時に意義があることを示唆する記述もみられた。具体的には「ICT を活用した特別活動の実践に関しては、学校再開後よりも休校中・分散登校中の方が特色が出ていたように感じる。今後は、現状のような感染予防に伴う様々な制限がある中で、特別活動においてどのように ICT を活用していかにかに注目したいところだが、まずは ICT の環境整備が優先されるべきであろう」である。GIGA スクール構想など学校教育の ICT 化が推進されている昨今、コロナ禍に関わらず特別活動における ICT 活用の実践事例の蓄積や意義の検討ならびに考察はこれからの研究課題であろう。

(長谷川祐介)

⑤ 新型コロナウイルス感染予防対策によって、あるいは他の教育内容の遅れを取り戻すために、特別活動の実践が制限されようとしています。こうした状況であるからこそ、見えてきた「特別活動の特徴」は何でしょうか。自由に記述してください。

回答は4つのカテゴリーに分類できた。

第一に、特別活動は集団・対面を前提とする活動であり、本来「三密的」であるということ
を再認識したというもの。そうだからこそ「実施するのは難しい」「遠隔で行うのは難しい」

という悲観的な立場と、この状況を奇貨として「特別活動の多様なアプローチを生み出すとき」と挑戦的な立場とがみられた。多様なアプローチとして「三密を避けた工夫」「ICTを利用する工夫」「安全な内容とやり方を子ども達と創造する工夫」が具体的に描かれていた。第二に、学校の存在意義は学習と関係づくりであり、特別活動は学習に間接的に関わり、関係づくりに直接的に関わることを再認識したというもの。関係作りが思うようにできない環境において逆にその必要性が痛感され、特別活動の必要性が再認識された。そして学習の遅ればかりに気を取られて関係作りをおざなりにすると、かえって学習意欲と学力低下を招くという危機感が記されていた。

第三に、ともすればルーティンになりがちな特別活動の意味・機能について子ども達とともに考える機会になったというもの。コロナを理由に特別活動をさぼろうとする大人がいる一方で、どうしたら子ども達が楽しみにしている運動会や児童会活動が実現できるかを真剣に考えた先生や子ども達がいた。何が正しいか大人でも正解が分からない状況のなかで、どのように工夫したら自分たちの健康と安全が守れるか、大人と子供が知恵を出し合い、行動する機会が与えられたのだとする意見が記されていた。

第四に、改めて見えてきた特別活動の特徴をキーワードで記す回答が多く見られた。そのキーワードをまとめたものが以下の表である。

| 機能 | キーワード |
|---------------------|--|
| 学校の存在意義となる活動 | 学校に不可欠のもの／子どもの成長に不可欠のもの／日本の学校を学校たらしめているもの※1 |
| 学校生活の彩・潤い・活力を与える | 学校生活の楽しみと彩り／潤いと活力を与えるエネルギー／子ども達を元気にする |
| 子ども同士、子どもと先生の関係作りの場 | 心の交流／人間関係作りの場／人間関係構築能力育成の場／対人間能力（気遣い・協力・相手の立場に立つ）を育てる／絆づくり |
| 学級づくり／子どもの居場所づくり | 仲間意識の醸成／支持的風土の醸成／学級経営の基盤（集団づくり・学習環境の整備） |
| 集団のなかで社会性を育てる | 集団活動で育つ社会性／自己有用感の育成／ |
| 子どもの主体性を育てる | 子ども主体の多様な実践 |
| 予防教育の場 | 心のケア／いじめ・不登校の特効薬／人とつながる不安の解消 |

（山田真紀）

⑥ 今後、再び休校（あるいは分散登校）となった場合でも、実施に向けた努力を最後まで追求すべきと考えられる特別活動の活動は何ですか？ それは何故ですか。自由にお答えください。

休校時においても実施に向けた努力をすべき特別活動の活動内容に関する質問である。「全て。実施に向けた「工夫」の追求が必要である。」というように「すべて実施すべき」と回答している者は一定数いたが、多くの回答者は特別活動の中でも一部の活動を取り上げていた。具体的には「学級・ホームルーム活動」に関わる記述が最も多く、それ以外では「児童会・生徒会活動」「学校行事」に関わる記述もみられた。

ここで注目すべきはクラブ活動に関する直接的な記述がみられなかったことである。特別活動に高い関心を持つ日本特別活動学会員ですら、クラブ活動は休校中に実施することをあまり考えていない可能性がある。

回答された記述内容は再休校時における特別活動の意義に関わることが示されていた。テキストマイニング、具体的には共起ネットワーク分析を行い、実施の理由に関わる記述において使用頻度の高い概念と回答者の属性（回答者が所属している学校種）の関連を検討した。分析の結果、「活動」や「実施」という概念の出現頻度が高かった。それ以外としては、「学校」「人間関係」などの概念の出現頻度が高かった。何かしら特別活動に関する活動の実施を担保することが大切だと認識していると推察される。

属性（回答者が所属している学校種）との関連をみると、小中高教員においては「成長」という概念の出現頻度が高かった。特別活動に高い関心のある学校現場の教員にとって、子どもたちの成長に関わる活動であるから特別活動の実施が望まれると推察できる。また「集団」という概念を主に用いていたのは、中高教員と大学教員で、小学校教員では出現頻度が少なかった。また「人間関係」は高校教員や大学教員、その他において出現頻度が高かった。

（長谷川祐介・小原淳一）

⑦あなたがよく知っている学校、または、あなたの勤務している学校における、新型コロナウイルス感染予防の対応としての特別活動の実践に関して、特筆すべき事例（新たな活動を創造して実践した事例、制約を乗り越えるために工夫した事例、子ども達が自主的に考え出して始めた活動等）があれば紹介してください。1つ以上の取組事例がある場合は、それらも紹介してください。複数の学校がある場合は、学校名に番号をふり、その番号を取組事例にもつけてください。なお、⑥までの回答と重複してもかまいません。

紹介された実践一覧は以下のとおりである（紹介者略）。なお、インターネット掲載版報告書では、学校名は匿名とする。

| 学校名 | 取組みの内容 |
|-------------|----------------------------|
| ① 愛媛県 A 小学校 | ①デジタル掲示板を活用した特別活動の実践紹介及び啓発 |
| ② 愛媛県 B 小学校 | ②個別の係活動の実施と情報共有の場の保障 |

| | |
|------------------------|---|
| 愛知県 C 中学校 | 在校生、教師、卒業生、地域の人々を巻き込んで、オンラインで、「今、みんなのためにできること」のアイデアを募り、できるものから実現させるしるしを Google フォームなどを駆使して作った |
| 東京都 D 小学校 | 子ども達にコロナの状況で、どのような活動だったらできるかを投げかける予定と校長先生がおっしゃっていました。 特別活動を専門にされている方が校長先生なので、面白い実践が展開されているのではないかと期待し、紹介させていただきます。 |
| 東京都 E 中学校 | ・マスクの着用や机の間隔をあけたり、事前に資料を作成し回し読みせず生徒が机を巡回して読んだりするなどの工夫をして学級活動を実施。 ・自宅学習期間中に、「自宅のできるふれあいボランティア」を募集した。 ・生徒総会や生徒朝礼を放送で行った。 |
| 福岡県 F 小学校 熊本県 G 小学校 | F 小学校：学校行事や児童会活動の工夫 G 小学校：学級活動や児童会活動の工夫 |
| 島根県 H 中学校 | 生徒が手洗い場の洗剤液の補充に力を入れていること、給食中に会話ができず静かすぎる状況に対し、生徒の意見でこれまで流れていなかった音楽が流れるようになったこと。 |
| 愛知県 I 小学校 | そばにできた藤田保健衛生大学関連病院が、情報の少ない段階で患者を受け入れたが、医療者との心の交流、理解を促進し、受け入れ修了後もお互いの組織を認める活動を行った。 |
| 熊本県 J 小学校 | オンライン学級会。オンライン代表委員会 児童・教師による You Tube 発信 等多数 |
| 埼玉県 K 中学校 | ①老人福祉施設のための手作りマスク作り ②市の担当課、地元消防署及び自治会の連携した「防災教育」の推進 |
| 兵庫県 L 中学校 | 市内の他中学校生徒会との交流会。これまでは実施されていなかったが、新型コロナウイルス予防対策によって、生徒会の活動が大きく制限されたことに不安を覚えた生徒会執行部の生徒らからの発案で、現在調整を進めている。(また、生徒会長が個人的に他中学校の生徒会長と SNS で連絡を取っている。学校での活動ではないが、生徒個人のつながりの可能性を感じた。) |
| 岡山県 M 高等学校 | HR のオンライン実施・進路指導のオンライン対応・課題研究活動のオンライン実施・社会連携事業のオンライン実施 |
| 富山県 N 小学校 | (学級活動 1) 学級目標のワークシートを配布し、宿題とした。 (学級活動 2) 学校再開時に養護教諭から新型コロナとその予防に関するお便りを出し、徹底を各学級で指導した。また、緩み始めた 3 週間後にビデオ教材を全校で一斉視聴し、学校再開でよかったこと、不安なこと、これからどのようなことに気を付けて生活したいかについて話し合った。 (児童会活動) 再開後すぐに委員会任命式を行い、校長が「コロナのせいで禁止されることが多くなるが、君たちの知恵でできることを提案してほしい」と呼び掛けた。 (異年齢活動) 校内コロナクイズラリーでは、校舎内各所にクイズを掲示し、学年ごとに回る時間帯を変えて実施した。 (儀式的行事) ビデオ放送で実施している。 (文化的行事) 体育館に全校児童分の作品を展示し、一本道の両側に配置して、保護者に見に来てもらう。 (体育的行事) 作品展示と同日に時間差で、学年ごとに 100m 走と全員リレーを実施する。 (遠足) 乗車数を定員の 2 分の 1 に制限し、各クラス一台の大型バスを使って日帰りの校外学習を実施する。 (奉仕的行事) 夏季休業中の地域清掃を企画中。 (その他) Zoom を使った授業参観を実施する。 |

| | |
|---------|---|
| 新潟県〇小学校 | 新潟市指定のICT研究と新潟県小教研指定の特別活動研究を統合させている。タブレットを使った話合いの在り方、指導方法を追求する。最も特徴的な取組は、次の姿勢でしかできない研究にある。すなわち、授業での話合いと学級活動の話合いを意図的に結び、話す・聞く・合意形成する力を育てながら、姿勢として「制限ある新しい生活様式下で子どもたちがやりたいと願うことを実現することにより、新しい何かが生まれてくるものを待つ」とする。手立ては「どんなものが生まれてくるか分からない。子どもが創るものだから」と、子どもたちに制限下でできる場や機会を柔軟に与えることを軸に指導の在り方を工夫するとしている。校長の「子どもがきっと新しいものを創り出す」と仕掛けながら懐深く待つ構えが面白い。始まったばかりで、研究がどう進み何が生まれるかはまだ見えていない。が、コロナ禍、アフター・コロナの新しい研究の1つの形に思える。 |
|---------|---|

(山田真紀)

その他、調査票には以下の質問があったが本報告書では省略する。

- ⑧最後にあなた自身についてお伺いします。あなたは、次のどれに該当しますか？ ひとつだけ選んで該当する選択肢の左にある○をクリックしてください。
- ⑨以上の設問への回答では書き切れなかったこと、本学会の研究推進への要望や期待など、ご意見等があればご記入ください。特になければ空欄のまま「次へ」をクリックしていただいてもかまいません。(報告略)
- ⑩特徴的なご回答については、改めて詳細についてインタビューさせていただきたいと考えています。インタビューにご協力いただける場合は、下の欄に連絡先(ご氏名、メールアドレス、携帯番号等)を記入してください。個人情報の扱いは慎重にいたします。

3. 調査結果を理解するうえでの注意点—おわりにかえて

本調査の調査結果から読み取るべき範囲について説明しておく。

まず、本調査は日本特別活動学会の会員を対象とした調査である点を確認しておきたい。全国の小中高の教員や大学教員一般の人々に比較すると、特別活動にとくに関心が強い人々が回答していることに注意が必要である。調査の母集団は全国の学校の様子や小中学校・大学教員の意識を代表しているわけではない。あくまでも、日本特別活動学会の会員が発言した内容であるということを意識して分析する必要がある。

また、調査を実施した時期が6月19日から7月15日であった点にも留意が必要である。6月19日は、都道府県境をまたぐ移動の自粛要請が全国でやっと緩和された日である。そして7月初旬は、国内の1日の感染者数が再び増加し始めた時期である。「Go To トラベル」キャンペーンが始まるのは、7月22日のことである。この時期、分散登校や時差短縮をしていた小中高等学校も少なくなかった。また、多くの大学では、遠隔授業が標準となっていた。このような時期に実施した調査であるので、回答者の方々は、未曾有の事態に直面しながらの暗中模索、試行錯誤の途上にあっただろう。現在（2020年10月）は、その時期から事態が大きく変容しているので、同じ人に同じ質問をしてみても、違った回答が返ってくる可能性が十分ある。

このようなことから、今回の調査結果を一般化・普遍化して論じることは慎まなければならない。一方、2020年6～7月のこの時期に、本学会の会員がどのような問題に直面し、どのように特別活動を考えていたのか、そこから見えてくる特別活動のあり方や課題は何かについて考察する材料としては、今回の調査結果は非常に重要であると考えられる。これらの考察を通して、本学会としてどのような研究を推進していくべきかをみなさんといっしょに考えることができればありがたいと考えている。

コロナ禍下の特別活動に関する学会員対象アンケートWG（通称：コロナ研）

代表 山田真紀（梶山女学園大学：研究推進委員会副委員長）

添田晴雄（大阪市立大学：研究推進委員会委員長）

田中光晴（文部科学省：研究推進委員会副委員長）

小原淳一（大阪市立大学：研究推進委員会事務局）

秋山麗子（神戸松蔭女子学院大学：研究推進委員）

長谷川祐介（大分大学：研究推進委員）

以上